

BOOKMARK

FREE BOOKLET [ブックマーク]

次号予告

BOOKMARK 06
2016 WINTER

「明日が語る今日の世界」

[ブックマーク]
2016年 秋号
Take free

05
2016 AUTUMN

巻頭特集
深緑野分

「過去の物語が未来を語る」

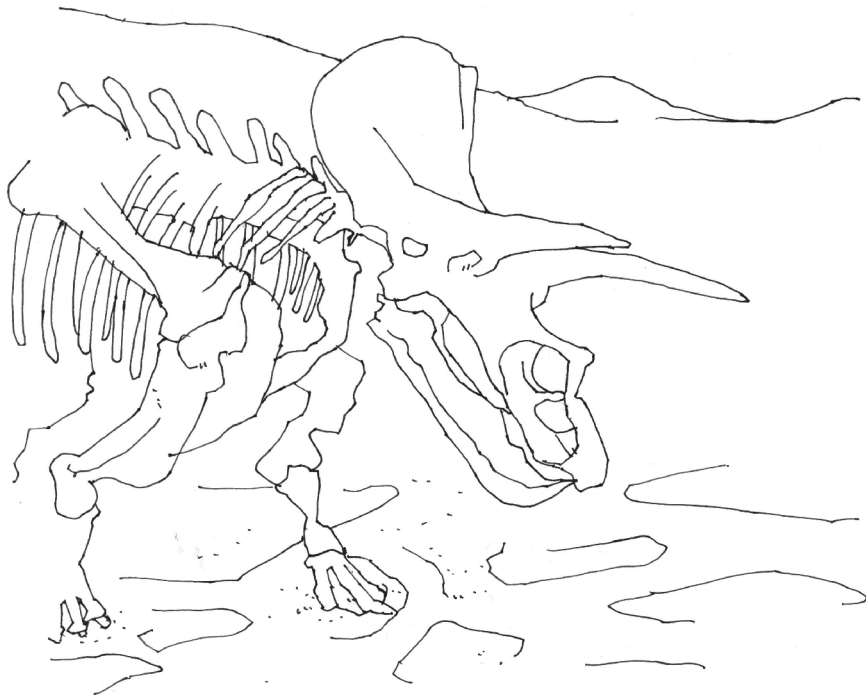


BOOKMARK

「BOOKMARK」を創刊した当初から、若い人に勧めたい、歴史に題材をとった小説やドキュメントの特集を組みたいと思っていた。それは三辺さんも同じで、話し合っていると次々に素晴らしい作品があがってきた。キルメン・ウリベの『ムシエ小さな英雄の物語』、ジュリー・オオツカの『屋根裏の伝さま』、タミ・シエム＝トヴの『父さんの手紙はぜんぶおぼえた』なんかも余裕があれば載せたかった。

とにかく面白い、読めば一生忘れられない、そんな多くの歴史がらみの作品の中から、16冊という枠のなかで、ある程度の読みやすさ、パリエーションなどを勘案して選んだのが、これ。則天武后からチェルノブイリまで。ロマンチックなものから、じつに生々しいものまでが並んだ。しかしこうやってながめてみると、残念ながら（編者の偏りもあるのかもしれないが）、20世紀以降の歴史を描いたものはずっしりと重いものが多い。これから先の歴史を題材にした未来の作品が、明るいものになればいいと思う。

（金原瑞人）



Special Guest

深緑野分

幼い頃、私は恐竜と戦争におびえていた。カーテンを開けて鋭い牙が見えたらどうしよう、あのサイレンは空襲警報かも。想像をたくましくして震える私に、両親は「恐竜は絶滅したし、戦争はもうしないって約束されているから、安心しなさい」と説いた。ちょうどテレビでは、大勢の大人たちがベルリンの壁を破壊する光景が映っていた。画面に隔たれていても強烈な感情の爆発を感じ、怖くなって母にしがみつくと、彼女はこう呟いた。「よく覚えておいて、世界が変わる瞬間だから」。

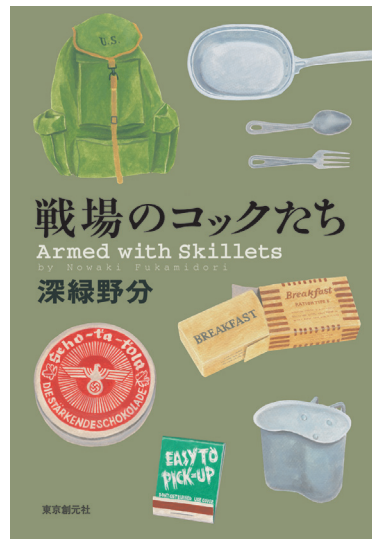
私が歴史に特別な興味を抱いたきっかけは色々あるが、そのひとつは、自分の恐怖を明らかにしたかったからだと思う。恐竜や戦争、冷戦について学ぼうとするうち、歴史番組や世界史の本を好む子供に成長した。どんな人が暮らし、日々を送り、どのようにして事件は起きたのか。過去の扉を開けて覗き込むと、歓喜や苦痛の声私を呼ぶ。理解が深まるほど恐怖は消え、過去の人の命と今の自分の命の重さは変わらないことに気づいた。

しかしある時、私と同年代の青年が「歴史は証拠がないから信用しない」と主張するのを聞いて、ひどく驚いた。遺跡や発掘物、当時の人々が残した文章や写真、映像についてさえ、「本物かわからない」と言う。人間の寿命は現在でもせいぜい七、八十年、もし記録が証拠にならないのなら、今ここにいる私は確かに本物なのに、

あと百年もしたら、存在すら信じてもらえなくなるのだろうか？

『戦場のコックたち』を書いた後で痛感したのは、「たとえ伝わらなくても、歴史は書き続けなければならない」ということだ。人間の記憶は驚くほど不確かで、後悔も約束も忘れてしまうし、命の時間には限りがある。空が繋がっていることは誰もが知っているのに、時を経ても同じ空だということは、あまり伝わっていない気がする。

過去の手触り、においを伝えるのに、小説は努力を続けてきた。自分もその後に連なれたら、と願っている。



『戦場のコックたち』

深緑野分

(東京創元社) ¥1,900+税

[Чернобыльская молитва
Хроника будущего]
Светлана Алексиевич

『チェルノブイリの祈り 未来の物語』
スベトラーナ・アレクシエービッチ
松本妙子 訳
(岩波書店)
¥1,040+税



著者アレクシエービッチは2015年にノーベル文学賞を受賞したベラルーシの作家。この本は1986年のチェルノブイリ原子力発電所の重大事故から10年後の1996年に発表された。著者は事故体験者500人以上に聞き取りをし、そのうち80人あまりの証言を本におさめた。事故の記録ではなく、人びとの心の記録。巻頭の「孤独な人間の声」を語るの、結婚後間もない夫が原発の初期消火に呼び出され、わずか14日間で帰らぬ人となったとき、23歳だった女性。巻末の「孤独な人間の声」は、16歳で出会った男性と大恋愛のすえに結ばれた女性が、放射線障害で「怪物」に変わり、はては夫を自宅で見取る深い愛と苦悩にみちた物語。戦争体験者のお年寄りも語る「チェルノブイリは戦争に輪をかけた戦争だ」。子どもも自分のことばで語る「死ぬのはこわくないわ。ながく眠っていてぜったいに目が覚めないのよね」。読むのは心が痛い。でも必読書。生きること、愛することの意味が詰まっている一冊。この本に学ばないのは、ただただ恥ずかしいことのような気がする。

(松本妙子)

[Gulf]
Robert Westall

『弟の戦争』
ロバート・ウェストール
原田 勝 訳
(徳間書店)
¥1,200+税



主人公のトムは、イギリスの中流家庭に生まれ育った15歳の少年。12歳の弟アンディは、ふだんから感受性の強い子どもだったが、ある日、体はこちらにあるのに、心だけが砂漠の中で湾岸戦争を戦うイラクの少年兵ラティーフと同化してしまう。知るはずのないアラビア語を口走り、空爆にさらされる恐怖を兄にむかって訴えはじめるアンディ……。

1990年8月に始まった湾岸戦争は、アメリカを中心とする多国籍軍が圧倒的な軍事力でイラク軍を叩き、翌年2月に終結した。当時、こうした現代の戦争の形に疑問をもった作者ウェストールは、この物語を一気に書き上げたと言われる。短い作品だが、着眼点、構成、そしてスピード感あふれる描写力が光る傑作。結局、アンディはつきものが落ちたようにふつうの男の子にもどるのだが、果たして「弟の戦争」はほんとうに終わったのだろうか？ 21世紀に入っても、世界各地で戦火が途切れることはない。ラストシーン、あなたはどうか受けとめますか？

(原田 勝)

[Suite française]

Iréne Némirovsky

『フランス組曲』
イレーヌ・ネミロフスキー

野崎 敏 / 平岡 敦 訳

(白水社)

¥3,600+税



フランスがナチス・ドイツに占領されたとき、まず何が起こったのか？ 時間が変わったのである。第二次大戦前まで、両国間には1時間の時差があった。占領後ドイツは自国の時間を押しつけ、フランス人たちに時計を1時間進めるよう命じた。何とそれが、現在に至るまでそのままになっている。しかしナチスがやってきた当初、人々はすんなり時計の針を進めたわけではなかった。「教会と役所の時計だけは、とうに正午を過ぎていた。(……)しかしフランス人の家庭はどこも、そんな辱めには屈せられないと時計の針を六十分遅らせていた。」占領直後に書かれた本書には、随所にこうしたリアルな観察が鏤められている。しかも細かな事実をふまえつつ、40人を軽く超える登場人物たちの動きをオーケストレートする腕前の鮮やかなこと！ フランス軍が瓦解してパリジャンが我先に首都を逃げ出す“動”の第一部と、占領下の緊張感に浸された“静”の第二部の対照も見事。戦争とは何かを立体的に活写した傑作を後世に託して、作者はアウシュヴィッツで絶命したのである。

(野崎 敏)



[Mit dem Rücken zur Wand]

Klaus Kordon

『ベルリン 1933』

クラウス・コルドン

酒寄進一 訳

(理論社)

¥2,400+税

時は1930年代、場所はドイツのベルリン。15歳の主人公ハンスは学校をやめ、働くことに。彼の家は当時の社会の縮図だ。失業した兄は筋金入りの共産党員、その共産党と敵対するナチ党に入った兄の幼馴染みと姉は恋に落ちる。道は違えど、みんな豊かな暮らしを手に入れたいだけだった。働きだしてみると、ハンスの職場も社会の縮図だった。ナチ党の工員たちに狙われるハンス。スポーツ(体操)に打ち込み、同じ職場の娘(ただしユダヤ人ハーフ)と恋をする普通の若者なのに。

どう生きたいか自分で決める前から決断を迫られる主人公。それは対立と分裂のうねりの中で閉塞した社会そのままだ。そんな彼の目を通してナチが政権を掌握する前後の動乱の時代が活写される。

ハンスが慕う兄は抵抗虚しくナチに連行される。兄の生き様を詳しく知りたい人はこの物語の前史『ベルリン 1919』をぜひ。またハンスが救った兄の赤ん坊が長じてなにを体験するか、ハンスのその後も含めて知りたい人は『ベルリン 1945』も読んでみてほしい。

(酒寄進一)

[Die schönen Tage meiner Jugend]

Ana Novac

『14歳のアウシュヴィッツ』

収容所を生き延びた少女の手記』

アナ・ノヴァク

山本浩司 訳

(白水社)

¥2,600+税



死者はいつまでも若く清らかだ——そう思ったがるのは生者の傲慢ではないだろうか。ホロコーストのアイコンにされたアンネの日記からは露骨な性的欲求も母への悪態も長らく削除されなければならなかった。ルーマニア生まれのユダヤ人アナはアウシュヴィッツを生きのび、アンネが残せなかった日記の続編を書き継いだに等しいのに、その名はかわいそうなくらい知られていない。「アイドル」になるには写真うつりが悪かったし、収容所の生き地獄を詳細かつリアルに捉える大人顔負けの観察眼がまずかった。イケメン看守に恋心を募らせる背徳も、食い物のために同胞を出しぬくユダヤ人たちの浅ましい姿も、無垢な犠牲者のイメージにそぐわないからだ。ましてや収容所体験を面白く読ませてしまう話し上手ときては不謹慎の誹りを免れない。しかし14歳の女の子が圧倒的な死の恐怖と戦うためには、辛辣な皮肉と冷笑で武装するほかなかったことを忘れてはならない。限界状況にあってはセンチメンタリズムなど何の役にも立たないのだから。こうして笑いの毒でもって歴史の猛毒を制する強靱な文学が誕生することになったのだ。

(山本浩司)



[La bibliotecaria de Auschwitz]

Antonio G. Iturbe

『アウシュヴィッツの図書係』

アントニオ・G・イトゥルベ

小原京子 訳

(集英社)

¥2,200+税

第二次世界大戦末期。ナチスのユダヤ人絶滅政策により、ディタは故郷のブラハを追われ、アウシュヴィッツに送られた。14歳だった。「こんなのってないわ、絶対にあきらめない」と、ホロコーストを生抜いたディタの心の支えになったのが、大好きな読書。彼女にとって「本を開けることは汽車に乗ってバケーションに出かけるようなもの」だった。過酷な労働、粗末な食事、蔓延する伝染病、ガス室……。「死の工場」と呼ばれたアウシュヴィッツ絶滅収容所には、若き指導者フレディ・ヒルシュが作った学校と秘密の図書館があった。本は「考えることを促す」危険なものとして固く禁じられていた。「図書係」に任命されたディタはブラウスの内側に隠しポケットを作り、命がけで8冊の本を守る。この本は、現在イスラエルの海辺の町で静かに暮らす女性の実話をもとに書かれた小説。ナチス強制収容所と言えば、『アンネの日記』のアンネ・フランクが有名だが、本の魔法に助けられて戦争の不条理と悲惨から生還した新たなヒロイン、ディタの物語も多くの人に読んでもらいたい。

(小原京子)

[Blackham's Wimpy

The Haunting of Chas McGill The Making of Me]

Robert Westall

『ブラッカムの爆撃機

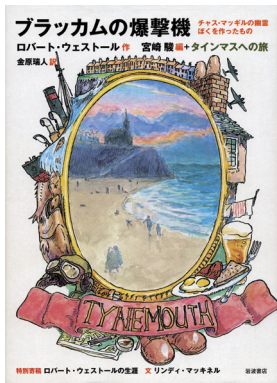
チャス・マッギルの幽霊 ぼくを作ったもの』

ロバート・ウェストール

金原瑞人 訳

(岩波書店)

¥1,600+税



絶版になっていたこの短編集を救ってくれたのは宮崎駿さんだ。「熱風」という雑誌に、宮崎さんはこう書いている。「ウェストールは兵役の義務で兵隊にはなったけれど（中略）『ブラッカムの爆撃機』のように爆撃機のなかの状況をリアルに描いた人間は、僕が知る限りでは世界で彼しかいない」

表題作の「ブラッカムの爆撃機」には、第2次世界大戦中、布張りの爆撃機に乗ってイギリスとドイツを往復する青年兵士たちが目にする、人間の邪悪さ、死、底なしの恐怖、圧倒的な閉塞感、そして友情がリアルに切なく描かれている。とくに燃えるドイツ機の強烈な描写と、主人公たちの愛犬になるジャーマン・シェパードが印象的だ。この本には、その他、ウェストールの戦争物でおなじみの少年チャス・マッギルを主人公にした2編と、リンディ・マッキネルによるウェストールの略歴が収録されている。そして宮崎さんの見事なフルカラーのマンガ「ウェストール幻想 タインマスへの旅」！

死ぬまでにもう1冊、こんなにぜいたくな本を作ってみたい。

(金原瑞人)



[Au revoir là-haut]

Pierre Lemaitre

『天国でまた会おう』

ピエール・ルメートル

平岡 敦 訳

(早川書房)

上・下 各¥740+税

フランスの文学界でもっとも権威あるゴンクール賞受賞作という、難解な印象があるかもしれないが、そこは『その女アクレックス』でミステリファンを熱狂させたピエール・ルメートルのこと、抜群のストーリーテリングで読者を引っばるエンターテインメント作品になっている。主人公のアルベールは優柔不断で意気地なしで、いつも貧乏くじばかり引いているダメ男。第1次大戦に出征して辛酸をなめた彼は、戦意高揚の熱気が冷め、疲弊した現実だけが待っている戦後の社会で失意の日々を送っている。いっぽう、もと上官のブラデルは戦没者埋葬事業の利権に食い込み、卑劣な手段を駆使してのしあがろうと画策に余念がない。そこにもうひとり、戦場で顔に大怪我を負い、人生に絶望したエドュアールが加わった三人の物語は、戦争の愚かさや虚しさ、悲しさを描いた群像劇として読みごたえ充分だ。自分ではなにも決められないまま、一発逆転の大勝負へずるずると足をつっこんでしまうアルベールの姿は身につまされるけれど、ユーモラスな語り口と相まって読後感は爽快だ。

(平岡 敦)

[Kim]

Rudyard Kipling

『少年キム』

ラドヤード・キプリング

三辺律子 訳

(岩波書店)

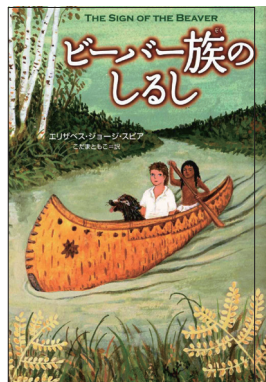
上 ¥760+税 | 下 ¥720+税



19世紀末、イギリス領インドでくりひろげられたスパイ合戦「グレートゲーム」。イギリス人でありながら、幼いころに孤児となり、現地の人々のあいだで育った少年キムは、イギリス側のスパイにスカウトされ、ロシアとの情報戦で活躍することになる。現地の言葉はもちろん、僧侶から金貸しや農民まで数え切れないほどあるカーストの服装や習慣を知りつくしているキムは、持ち前の賢さと機転で危機を乗り越えていく。だが、そんなキムも、唯一チベットのラマ僧には頭があがらない。最初は物珍しさから（そして、スパイ活動の隠れみみとして）巡礼の旅の供をするが、次第にラマの純粋さと気高さに惹かれていく。そしてラマもまた、自分を慕う弟子を心から愛するようになるのだ。

舞台となる、アジアの主要道だった〈大幹道〉や、市場〔バザール〕、隊商宿、そしてそこを行き交う人々の描写からは、まるでその場にいるように当時のインドの光景が立ちあがる。作者キプリングの天才ぶりを余すことなく味わえる一冊！

(三辺律子)



[The Sign of the Beaver]

Elizabeth George Speare

『ビーバー族のしるし』

エリザベス・ジョージ・スピア

こだまともこ 訳

(あすなろ書房)

¥1,500+税

1768年の春、マサチューセッツ州の町からやってきたマットは、父さんとふたりで大森林を切りひらき、丸木小屋を建てはじめる。やっと小屋が完成すると、父さんは母さんと妹を連れてくるために、12歳のマットを残して旅立つ。ところが、父さんは約束の日にもどってこず、マットはたったひとりで暮らさなければならない羽目に。おまけに、あたりには北米先住民たちの気配が……。こうして物語は、ひとり残された少年が遭遇する緊迫感あふれるエピソードから始まるが、やがてマットと先住民の少年エイティアンが紡ぐ友情の物語に深まっていく。新しい価値観を理解するには、まず自分の心を耕して、雨が大地にしみこむように受け入れることだとしみじみ感じさせられる。作者は、メイン州の大森林でひとりで暮らすうちに先住民の父子と友だちになった白人の少年の実話を読んで、この物語を書こうと思ったとか。80年代に書かれた物語だが、自分とは違う人々に対する偏見や憎悪の渦巻く今の時代にこそ、ぜひ読んでいただきたい。

(こだまともこ)

[*Girl with a Pearl Earring*]
Tracy Chevalier

『真珠の耳飾りの少女』
トレイシー・シュヴァリエ
木下哲夫 訳
(白水社)
¥950+税



表紙の写真の絵を見て、あ、見たことがあると思ったひともいるかもしれません。小説の主人公はこの少女です。オランダにデルフトという小さな町があり、少女の絵を描いた画家のフェルメールは17世紀にこの町で生まれました。画家は実在し、暮らしぶりを伝える記録も残っていますが、モデルとなった少女のことは名前をふくめ、何もわかりません。作者はフェルメールの住まいや家族など記録に残る事実はすべて盛り込んで小説の舞台とし、モデルの少女を女中と仮定して、『真珠の耳飾りの少女』が描かれるまでの経緯を少女の目を通して綴ります。

覚えていたフェルメールの絵があれば、思い出してください。どんな絵か知らなければ、インターネットで検索してみてください。すぐに見つかります。室内に何人かひとのいる絵が多く、見たままを素直に描いただけのように、見始めると時の経つのを忘れます。この小説にもそんなところがあります。些細な景色、言葉のやりとり、情感の震えの積み重ねが心に残ります。

(木下哲夫)

[*The Shakespeare Stealer*]
Gary Blackwood

『シェイクスピアを盗め!』
ゲアリー・ブラックウッド
安達まみ 訳
(白水社)
¥1,700+税



四百年前の英国。寒村に住む一四歳の孤児の徒弟ウィッジは、主人にこきつかわれる生活からいつか抜けだすことを夢見ている。ある日、人気劇作家シェイクスピアの台本を盗めという指令を受け、ロンドンの劇場に潜入したところを、役者たちに見つかってしまう。苦し紛れに、役者志望のふりをすると、意外にも温かく迎えられる。劇団には親身になってくれるおとなたちと、それぞれ個性豊かな少年たちがいた——ひとつつっこいサンダー、謎の美少年ジュリアン、いじめっ子のニック。ひょんなことからチャンス到来。ウィッジは無事、台本を盗みだせるのか？ それとも……？ やがて少年は信頼、友情、家族の意味に目覚めていく。

シェイクスピアものの歴史小説は多けれど、これは類をみない。じつによくリサーチされ、史実と虚構を巧みに織り交ぜている。鍵は速記術、海賊版、少年俳優。荒唐無稽に見えつつも、ある意味、ありえる話。ユーモアたっぷり、スリル満点の冒険小説で、つづく第二作、第三作をとおして、ウィッジ少年や仲間たちの成長も追ってほしい。

(安達まみ)

[The Medici Seal]

Theresa Breslin

『メディチ家の紋章』

テリーザ・ブレスリン

金原瑞人・秋川久美子 訳

(小峰書店)

上 ¥2,000+税 | 下 ¥1,800+税



舞台はルネサンスの時代のイタリア。主人公のジブシーの少年は、恐ろしい男に追われている。そこを偶然、レオナルド・ダ・ヴィンチに救われるところから物語は始まる。少年は、とっさにマッテオと名乗り、自分の素性を隠しながらダ・ヴィンチのもとで働くようになる。しかし、行く先々でマッテオに追っ手の影が忍び寄る。それはマッテオがある秘密を握っているからだった……。マッテオの抱える秘密とは、そしてその秘密の本当の意味とは？ マッテオが数々の危険と困難を知恵と勇気でぐりぬけ、やがて賢くたくましい青年に成長していく姿に、なんだかこちらまでうれしくなってしまう。また、教皇、メディチ家、チェザレ・ボルジアが趨勢を競う十六世紀のイタリアの様子や、当時の人々の暮らしぶり、ダ・ヴィンチによる数々の絵画・発明品と、全人の人と呼ばれたダ・ヴィンチの人となりが描かれているところもこの作品の魅力。とにかく読みどころが多く、上下巻にわたる長編ながら、あっというまに読ませてしまう一冊です。

(秋川久美子)

[Impératrice]

Shan Sa

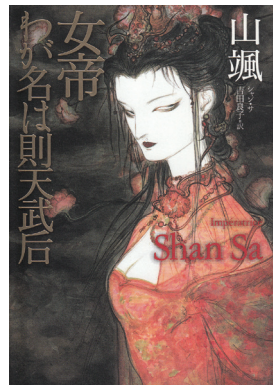
『女帝 わが名は則天武后』

シャン・サ

吉田良子 訳

(草思社)

¥1,800+税



則天武后と言えば、かつては「夫高宗の死後、帝位を篡奪して唐朝を中断させた稀代の悪女」とされていた。しかし、現在の研究では、周朝を建てた正式の皇帝として認められ、その政治手腕や業績が高い評価を受けている。

何の後ろ盾もない少女が後宮に入り、才能だけを武器にして頂点へと上り詰めていく……。本書に描かれるヒロインの生涯は、そのまま著者シャン・サの姿と重なる。中国の豊かな家庭に生まれ、幼くして文才を発揮したシャン・サだが、天安門事件後、中国では自由な創作活動ができないと悟って単身渡仏した。その時点で全くフランス語を理解しなかった彼女が、わずか十余年後にフランス語でベストセラーを生み出すまでには、どれほどの努力と苦難があったことだろう。取材で陵墓を訪れたシャン・サは「武后から、その言葉を代弁する許しを得たと感じた」と述べている。

「中国史上唯一の女帝」の物語。初の女性都知事が誕生し、アメリカでも初めて女性大統領が生まれるかもしれないというこのとき、是非ともお勧めしたい作品である。

(吉田良子)

[The Untold History of the United States
Young Readers Edition, 1898-1945 Volume 1]

Oliver Stone & Peter Kuznick

『オリバー・ストーンの告発
語られなかったアメリカ史』
オリバー・ストーン/ピーター・カズニック
鳥見真生 訳
(あすなろ書房)
第1・2巻各 ¥1,500+税



ベトナム戦争従軍体験のあるオリバー・ストーンが国際政治学者と組み、南北戦争から現代までの「語られなかった」アメリカ史を掘り起こすYA版シリーズ第1巻・2巻が本書だ。「裏アメリカ史」的な本は多いが、さすが映画監督、本書は“強いアメリカ”を標榜する側と、“アメリカの良心”を体現する人々との心揺さぶられる人間ドラマになっている。

かつてアメリカには、徹底的な平等を訴える社会主義や軍需産業の国有化に、国民がこぞって賛同する時代があり、第二次大戦中、国民の圧倒的支持を受けていたのは、人種差別と貧困撲滅を唱える反戦派の副大統領ウォレスだった。しかし、大統領になったのは「ジャップ」という言葉を連発するトルーマンだった……。

いつのまにか歴史のifを考えさせられている。もしも事情が違っていたら、世界は、日本はどうなっていただろう？ 原爆不使用という選択肢もあったのではないかな？

想像力は未来を作る。過去に流されない未来はあるはずだ。本書にはストーンが提供してくれた、自分の頭で考えるための材料が詰まっている。(鳥見真生)



[Listen to the Moon]
Michael Morpurgo

『月にハミング』
マイケル・モーパゴ
杉田七重 訳
(小学館)
¥1,600+税

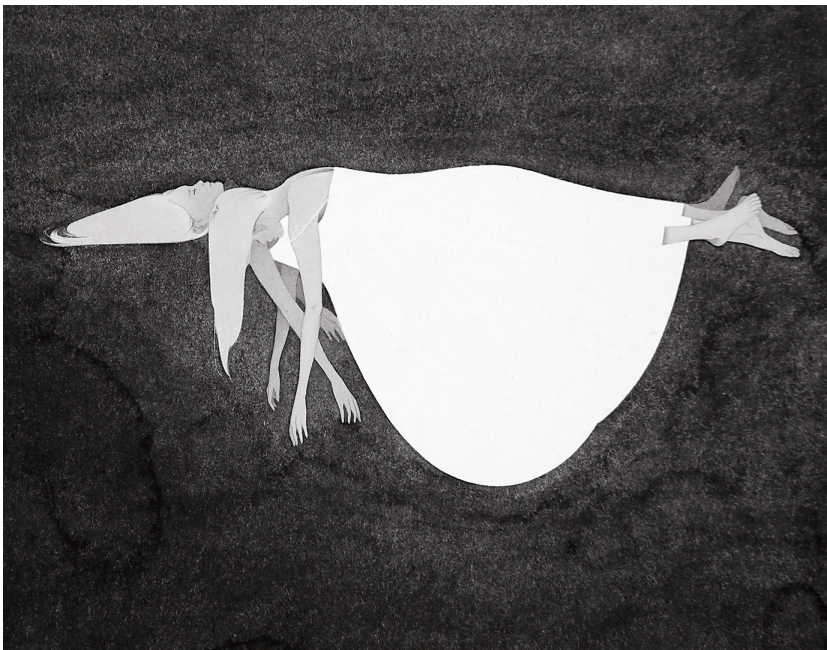
第一次世界大戦下、イギリスの孤島で飢え死に寸前のところを発見された謎の少女ルーシー。記憶をすっかり失った物言わぬ女の子は、いったい何者なのか。このルーシーの物語と並行して語られるのが、アメリカのニューヨークに暮らすルーシーと同じ年ごろの女の子メリーの物語。戦地で負傷した父親のもとへ、母とともに船でむかうのだが……。

生死の境をさまよう壮絶なサバイバル。失われた記憶を取りもどそうとする少女と、彼女を取り巻く人々の、国境を越えた善意と時代にまどわされた冷酷な差別。登場人物ひとりひとりの心情をせつないほど細やかに描きながら、ふたつの国とふたつの時間軸が重なるドラマチックな結末へ、読者を一気に運んでいく。

1915年に起きたルシタニア号事件を題材に、モーパゴには珍しいサスペンスタッチで描かれた長編大作。声高に戦争反対を訴えるのではなく、史実を丹念に掘り起こし、ただひたすらに豊かな物語をつむぐ、彼の真骨頂がここでも遺憾なく発揮されている。

(杉田七重)

「すべてねむるまで」



BOOKMARK

【ブックマーク】

05

2016 AUTUMN

2016年9月発行

印刷：グラフィック

URL : kanehara.jp/bookmark/

Twitter : @bookmarkFB

Facebook : facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行

金原 瑞人 (法政大学教授・翻訳家)

「BOOKMARK」、2年目に入りました。「やった！」という感慨も、「いや大変だった！」というため息もなく、ぼんやり6号、7号のことを考えています。どうぞ、まだまだお付き合いください。

編集

三辺 律子 (英米文学翻訳家)

普段は「知識を得るために本を読むわけじゃない！」とか言っているけれど、本はやっぱり知識の宝庫でもある。歴史小説のおかげで、どれだけのことを知っただろう。その時代の事実だけでなく、「空気」まで伝えてくれる本たちを選んでみたつもりです！

イラスト・ブックデザイン

オザワミカ (イラストレーターとかいろいろ)

学生の頃、「歴史」を暗記科目として認識していたわたしは、とても苦手でした。今回の紹介文を読んで、すべての本に興味湧き、こういう本も読んでたらよかったんだよなと思いました。これから読みます。